

柳土ほんのろ

第12号



萬松院啓 突拾遺兼前州太守丹治真入關鐵直邦大屋

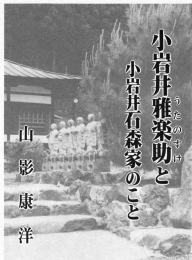
享保二十年乙卯

二月二十六日

徳川五代将軍綱吉公の側近として、三方石の大名に就いて
黒田直邦公は、この飯能の地の領主であり、た
ゞ代吉宗公の片腕としても仕えをなす御家臣である
い、また終生出頂の墓碑は、孤高の人のことと、端正な姿で立ってしま
二七〇年の歳月は英雄の石記を、またまたかえ、答出して
寂々とした、風情が漂っている。

小岩井雅楽助と

小岩井石森家のこと



山影康洋

小岩井の石森家は代々曹洞宗長泉寺（矢重・淨心寺住職山影裕昭兼務）を菩提寺としておられる。以前、石森秀雄氏から、祖父の平作氏が「秀ちの先祖に馬術の名人がいたそうだ」と語っておられたことを伺った。石森家には慶長三年（一九五八）小岩井村御地誌帳（横地帳のこと）が遺っており、そこには雅楽助の名が記されている。また、寺の過去帳からも、石森家は古い家で、小岩井雅楽助の子孫であることはまちがいないと思ふ。その確信を得るために、系譜を辿ってみることにした。

天正十八年（一五九〇）天下統一を目指す豊臣秀吉は、二〇

いたというから明らかに誤りである）をもって守っていた。同月二三日、前田、上杉、真田昌幸、その他各地で降った北条方軍勢など一万五千余の大軍で神宮寺城（攻め寄せた）

もより先は見えていたが、屋頂には大方勝敗が決した。その中で中山家範と狩野一庵だけはよく奮戦して、度々前田、上杉勢を撃退した。だが兵力の差は依然ともし難く、近藤、金子らの部将は討死、横地吉信は落去ののち自刃して果てた。このような状況になってもなお家範は馬上から槍、太刀をふるって戦い続け、前田、上杉勢を数百余も討ち取ったという。この時家範が守備していたのは中の丸とも小宮曲輪ともいうが（実際に城址に行ってみると場所目には同じ通り）、ひととき自立つ働きをする家範を見て前田利家は感服し、松井田（群馬県）、松山（川島町）両城で降った金子紀伊守、小岩井雅楽助たちを呼んでいった（ここから雅楽助が出てくる）。

「あの者らの働き殊勝ではあるが、やがて斬り死するか、自刃して果てるであろう。なれど死なすには惜しい。誰ぞ、中山を知った者はいないか」

「よく存じております。一人は中山勘解由左衛門と申す丹治の党の武勇の者にて、高麗流八条馬術の名手、我らはその門人でござります。また、いま一人は狩野一庵と申して陸奥守殿の右筆より出世して老職となりし業の者でござります」という。

「その方らすぐさま馳せ向かい一命を全うして我等の陣に加わると言うので、紀伊守と雅楽助はすぐに城へ向かった。小宮曲輪についた二人は城門を叩いたが答えがなかったため、脇門を押し破って中へ入ってみると、自刃して果てた後であった。

余談だが『飯能郷土史』ではこの後いくら城騒ぎがある。それでは、二人が城に入った時には、まだ家範の妻は息があり、家範の助命の旨を伝えると、妻は怒って、

「敵に降つたふがいない者共と言葉を交わすのめがらわしい。家範が妻の最期を見よ」と

と二人を罵り、懐剣を取りなおして見事自害を了げた、ということになっている。だが、これは古記録には全く載っていない。少々話が出来すぎていて、この話を探っている本を私は小学校の時読んだことがあるが、石森家には迷惑なことである。恐らく、郷土史は戦時の編さんであるから、忠孝の風潮を賛美し



【慶長三年五月 小岩井村御地誌帳】
（石森秀雄家蔵）

●左の写真は御地誌帳の一部。雅楽助、回書、三部左衛門など、今も子孫が續く家の先祖の名が見える。

天明治以降のつくり話をそのま
まうけたものであろう。

なおこの時、家範の嫡子兼守、
次子悟吉、一庵の嫡子主膳正は
脱出し、後、ともに徳川家康に
仕えたことは周知のとおりであ
る。

さて、紀伊守と雅楽助は家範
が自刃してしまつたので、仕
方なく利家の陣へ戻つてこれを
報告すると、

「情しむべき武士たちであつた
ことよ。」

と哀れんだという。

この時前田勢のつた首級二
八〇、上杉勢のつた首級三七
三、と「関八州古戦録」にある
が、諸書まちまちで、はっきり
とはわからないが、古戦録の
記述と大差ないので類推してみ
ると古戦録は合計六五三、この
他討ち捨てられた者、落武者狩
りで討たれた者、涙手を負つて
後日死亡した者を考えれば、一
千人を超える討死者がいたも
と考えてよからう。この時の状
況をよく伝えるものに、西多摩
郡五日市町の真言宗豊山派の古
刹、「大悲願寺」の所蔵する通
去帳がある。これは元禄年中に
書き改められたらしいが、天正
十八年六月の項には八王子合戦
の様子を詳細に書かれている。

また、村山領の岸（現在も武

蔵村山市に岸という地名がある
からその人だろう）入道吉家
が、六月一日に拝島で討死した
という記述があり、一般には知
られていない戦いがあったこと
がわかる。さらに、現五日市町
附近の住人、高尾備前が、二三
日に負傷し、二八日に死亡した
というのは、首をとられた者以
外に討死した者がいたことを示
す良い資料である。

数日後、小田原の氏照は八王
子落城の報を受けると、悲しみ
の余り床を叩いて号泣したとい
う。また、家範の首級も前田勢
によつて、豊臣秀吉のもとに送
られるが、利家から家範の奮戦
の様子を聞いて感服し、中山勘
解由左衛門首と書いた札（首札
という）を家範の首に付け、丁
重に小田原城内に送つた。いか
に家範の武名が高かつたかが知
られるだろう。

さて、さきに小岩井雅楽助が
家範のことを、高麗流八条馬術
の名人でその門人である、とい
つた条があった。石森家の先祖
の馬術の名人、というのはいま
り、雅楽助のことではないとい
ては、元龜二年（一五七
一）武田勢の授軍として三方ヶ
原合戦に参戦した中山家範は、
その馬術の妙技を信玄から絶賛
された、という程の名人である。

その門人であつたのだから雅楽
助も馬術に巧みであつたらうこ
とは容易に想像できる。なお、
石森家は五代目の当主がやはり
雅楽助（雅楽佑と書いて、うた
のすけと読んでいたようだが）
と名乗っている。

石森秀雄家の初代は元龜二年
（一五七一）没、長泉寺の開基

※注 石森家（小岩井氏）の右
隣に門番として屋敷をかまえた
らしい、ということが、同所の
築地家の家の伝えに残っている。

◆内蔵助 石森内蔵助（没年不
明）→現十四代石森重夫家。

◆三郎左衛門 石森三郎左衛門
（長泉寺の中興開基）元和元年
（一六一五）没→現十四代石森



（石森家の位牌）
（長泉寺蔵）

右側の上段、右から二番目が雅楽助
（享保年間の遺立）
左側は石森三郎左衛門の位牌。
（元禄六年の遺立）

敏夫家。

※図書 内蔵助・三郎左衛門の
三家は、小岩井家の寄子（また
は寄駒というべきか）→家臣
として従つていたものであろう。
天正十八年の戦いにも当然出陣
していたことと思われる。

以上のこととは、「関八州古戦
録」「南東太閤記」「小田原北

条記」「大日本人辞典」『新
篇武蔵風土記稿』の文献により、
また長泉寺檀家小岩井字下火各
家の開書きによつて記したもの
である。

なお、現在市内には小岩井姓
を名乗る家が九軒あり、内二軒
は下直竹である。また、小岩井
から榎坂を越えた列生には石森
姓の家が多い。これらの家が小
岩井雅楽助一門につながらるかど
うかは、これからの研究による。

※注 新篇武蔵風土記稿、横見
郡根小屋村の項に松山古城の説
明があり、その中で、天正十八
年の松山攻めの折に小岩井（小
倉井と誤つて載っているが）雅
楽助は城代難波田因幡守（富士
見市南畑の出）、家老格木呂子
丹波守（小川町木呂子の出であ
らう）、軍監金子紀守（前出）
などにつづいて名が載つてい
るところをみると、順番からい
って松山衆の侍大將位の中級武士
であつたのだろう。



シリーズ
地場産業

一橋御領知赤沢村の中堅農民と生活

浅見 茂

今回、私に与えられた課題は、「原市場地区の地場産業」ということであります。しかし、原市場郷土史研究会に於いての研究資料のまとめも出来ておりませんので、近世末期に於いて一橋領赤沢村に関する古文書をつまみ食いして、生産にたざざわる農民の生活の中から地場産業を考えてみました。

一、一橋領山三村
寛保元年（一七四一）徳川八代將軍吉宗の第五子宗尹により御三卿の一つとして一橋家が創設されると、西に原市場、唐竹、赤沢の三カ村、南に下直竹、上下畑村、北に上田波目、平沢、横手、梅原村等、黒田領の旗本村を囲むようにして十七カ村が、天領で伊奈半左衛門の支配から配置替えになりました。

原市場村：高四〇石余、唐竹村：高九五石余、赤沢村：高三七三石余の三カ村を、当時一橋御領知山三村と称しておりました。赤沢村は今の飯能市大字赤沢全域で、中屋敷、日影、茶

内、赤沢、鹿戸、黒指、久林の七つの中字に分かれています。

二、赤沢村の産業
天保三年（一八三二）赤沢村の「村差出明細帳」によると、石高は三三七石二升一合、内二石二斗六升、田反別一一反八畝十一歩、三十七石七斗六升一合、畑反別五六町五反四畝二五歩、家敷数一二十軒、内一一三軒百姓家、六軒寺、一軒山伏、総入別五八一人、内三三六人男、二七五人女、六人僧、一人道心（神主）、九匹馬とある。

「当地百姓男は農業の間隙を焼き、木挽、炭駄賣をとる。或いはふじを伐り、まき、たきぎを拾い、野方辺に負出し、菜、大根に取り換え夫食の足合にいたし候。女は朝夕の飯をたき野菜をこしらへ、夏は蓑を倒い絹を織り、又は糸に引きおき、冬春はしま、麻、太布少々織り申し候。紙すき百姓も御座候。いずれも少しづついたし候。田方は一毛作、畑方は両毛作、大表、小麦及び雑穀の粟、まきび、稗、大豆、そば、その他木綿、

葉大根、たばこ少々及び油、紙漆を産出し、当時最寄りに飯能村、青梅村と申す市場あり、売り物は絹、糸、しま、麻、太布の他、紙、炭等に候。当村職人は医師二人、大工一人、種や五人、鍛冶や一人、馬くらふ一人、紺や一人、酒造二人、但し耕作つままつり候」とあります。

右の如く生産物は多いが、木材切り出しについての書き上げはない。漸く明治三年の明細帳に初めて見ることが出来る。それによると、原市場村伐採本数千本位、唐竹村三百本位、赤沢村九百本位、いずれも二尺を頭に老尺落とある。しかし、明細帳にはないが、日雇い仕事としては、木挽、筏くみ、筏のり、皮まき等がある。江戸へ運んだ木材は多く、農民の生活には無くてはならぬものであった。

三、中堅農民の生活
安政四年（一九五八）の宗門人別帳の中から、石高五石五斗三升の一家を選び出した。その収入及び支出状況を見た。主な収入は、畑作の大表、小麦、雑穀類と養蚕、機織り、林業関係の日

雇い仕事、材木の切り出し、皮まるき、筏くみ、筏のりにより賃金を得た。漆も少々だが収入の足しになっている。支出の方は年貢金壹兩二朱、外に村人用負担金、川々園役諸掛かり、御取り締まり御出役様巡回入用金、將軍様日光御参詣御伝馬割り当金等が、年により計上された。



四、貧困者対策
凶作、飢きんによる生活困窮者に対しては、次のような処置がとられた。

貯穀倉が村内に二カ所あり、年貢用の粟、稗が貯えられており、村役人により厳重に管理されていた。また、天保の飢きん（一八三三）の際にはおおいに利用されている。主として貧困者に貸し出されている。さらに天保八年（一八三七）には村内

有志二十五人で三十八両の金を集めて、飯能、笠縫で穀類を買い集めて、五十五軒、二百二十名に対して支給している。その外一橋の役所に請願して、御手許の借金を無利子で十年、年利七分で三年返済で貸し出されている。かように凶作、飢きんの折りは村内での共済方法が種々とられている。

五、文化遺産

祖先の残した文化遺産は数多くあるが、今だに立派に建つ金鍋寺は二十六軒の檀家によって建立された建物である。また、最近御光を浴びた萬葉の句碑等、苦しい生活の中からこんな遺産を残した祖先、日々の生活の中にも精神的余裕を感じることが出来ます。



シリーズ 地場産業

明治八年ころの

岩沢村の産物と

農家のくらしについて

西野長治

加治地区の村々は明治・大正の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

の頃、飯能の宿場に対して、『在

ようすがわかるように会員が協力してまとめました。

この資料展は前年の『がんせ

いくすの資料』に続くもので、厳

しい環境、条件にめげず、助け

あいながら速く働いた父祖の

ことを思い、これを語り伝えたい

念願から企画しました。主旨

を、理解いただければ幸いです。

●村誌調査による岩沢村基礎資料の抜粋

〔面積〕一〇三町六反九畝二三

歩。〔戸数〕一〇三三八戸。〔人口〕

六六五人。〔内訳〕男三二七人、

女三三八人。〔荷車〕一一輛。〔馬〕

一〇頭。〔水車〕二カ所。〔人渡船〕

一機。〔馬渡船〕一機。〔岩沢村の労働人口

粟(あわ) 一六、六一四立

稗(ひえ) 八六四〇

蕎麦(そば) 九、五八五〇

胡葱(ごんじゆ) 三二四立

薔菜(さざなみ) 二〇、四三三〇

味噌 一四、三二五〇

蘿蔔(だいご) 二〇、四三三〇

牛蒡(ごぼう) 九六六〇

蕪芋(かぶ) 四、一八一〇

里芋 二六、七〇〇〇

薩摩芋 三二、二七五〇

茄子(なす) 二、七三三〇

冬葱(ねぎ) 五二八〇

菜子(なたね) 一七三立

胡麻(ごま) 一七六〇

茶の子(ちやのこ) 三三五〇

栗子(あわたたね) 二七五〇

鶏(にわとり) 二一六羽

鶏(たまご) 二、一八二ケ

製茶(ちやみちぎ) 一、九二二〇

繭(まゆ) 三、〇二四立

木綿織(もめんじま) 五、四五〇反

藍染(あいのぼ) 三、〇〇〇

薪(まき) 一、一、八八八〇

桑(くわ) 七三、八四五〇

シヤモ 六羽

シヤモ卵 二〇ケ

●村誌調査と物産表が教えて

くれるもの

一、幕末から明治維新、文明開

化と激動の時代を生きた農民の

姿が想像される。耕作は水く中

世からの踏襲で、埴耕作りが

農家の基本に変わり、運搬、

農作業、耕とりなどの敏しさが

しのばれる。

二、おもな収入源は養蚕、製茶、

機械づくりで現金を得る場が

なく、自給自足が基本で、経済

的には恵まれていなかった。

三、木綿織五、四五〇反の生産

にはおどろく。これは女一人年

平均二〇反余、一カ月は女一人年

く織っており、育児、家事をか

なし、電燈も無いのに夜なべを

続け、一家を支えてきた女の太

きな力には感嘆します。

四、綿の生産が表になく、記載

漏れか不明。綿の栽培や糸紡ぎ

の話は知られており、今後の調

査にまちら。

五、男女別労働従事者が明確で、

生産物の品種、数量共に多く、

生きるために農民が必死で働い

てきたことがわかる。

六、この物産表の年は豊作か、

平年作か不明。災害や凶作のと

きのことも調べたい。

七、米は収量少なく、麦、雑穀

が主食で芋類、野菜等で補った

食生活がどこも一般的。

●種の名産地だった岩沢村

●甲州丸、霜丸(柿の種類)

を江戸へひきぎて(売って)く

らしの質となせり。云々と新風

記にあるほど岩沢柿は有名でし

た。(江戸まで運び、いくらに

売れたらうか?)

●貴重な古文書と、その内容

について

この『村誌調査』は明治一一

年八月に岩沢村戸長(村長) 田

淵要造から埼玉県令(知事) 白

根多助宛報告したコピーで、生

産物は明治八年調(一八七五年)

と明記されています。

内容は支配者の交通、地誌、

歴史、産業、交通、教育、神社

仏閣など二五項目と多岐に亘る

報告で、加治全地区の当時が推

測できる貴重な資料といえます。

今回は、郷土資料展に展示し

た生産物と当時の農村の生活を

中心に紹介し、その他は後日に

ゆずることにしました。



展示会場にて

中国旅行へのみちしるへ

中国旅行のガイド達

滝沢充

早春三月十四日、午後三時二十分成田発の中国民航機が北京空港に着いた時、もうあたりはうす暗くなつて時計は午後七時半を指していた。

日本との時差は一時間だから現地北京時刻では午後六時半である。

特らくたびれる程待つて、やっと出てきた荷物を拾いあげ、我々、飯能中国三誌の会訪中団、一行二十三名が空港のロビーに出て来た時、まだかなり出迎える人ばかりがしていた。

昨年一回訪中の時は、旅行者を頼んで居なかつたので、空港で大変まごついたが、今回は、専門業者に依頼し添乗員が居てくれたので大分やすかつた。

私は、運行担当者だったので訪問予定の人民中国社の人が見ているかも知れないと思ひ、他の人より早くロビーに出て見た。すると、スーツにネクタイ、ダークグレイのコートを着て、眼鏡をかけ、背の高いダンディな青年が走り寄つて来た。

「あ、いらっしやい。おつか

れさまでした。お待ちしてました。ここにしながら日本語で話しかけて来た。

私はこの青年の顔に見覚えがなかつたので、一瞬、人違いされたかなと思つて返事もせず立ち止つた。すると、

「はんのう三誌の会の方ですね。わたしは、中国国際旅行社ガイドの陳と申します。」

と、言つて名刺をさし出した。「人民中国社の方は来ていますか。」

「いいえ、来ていません。私ひとりです。」

ちよつと癖のある発音ながら丁寧な日本語である。

日本人添乗員の藤巻さんとの打ち合わせも終り、かんたんな初対面の挨拶の後、出迎えるバスに乗つて、暗い田舎の専用道路を北京市内へと向つた。バスは日本の日野自動車工業製。

こうして、中国旅行社の陳さんと、以後九日間の全行程を共にすることになった。特に、北京三日間の見学訪問については、すべて陳さんの案内によつた。

陳さんは、南京大学の出身。歴史文化に大変くわしく、それぞれの場所での歴史を通して見た

現在をわかり易く説明してくれた。だから、二回目の北京ではあつたが、新しく学ぶ所も多かつたのである。

日本人添乗員の藤巻さん、実はこの人は女性で二十うん才、大変明るく暖か味のある。おねえちゃん、でも、しかも仲々の美形、おじいちゃんも多い男性ばかりの一行の中で、特にアイドルの存在であつた。当然のことながら成田から成田まで九日間の旅を、寝は別にして、食と行動を共にしてくれたのである。

ある時、みやげ物店の装飾品売り場で、彼女は、

「そんなお金があつたら、私、お酒を飲むわ!」

と、のたまふた。大分いける口。一カ月程前、ある県の親友会をおじいちゃんばかり二十名程を引きつれて、一人で、モンゴルのウランバートルまで行つて来たと言う。勿論、現地ガイドは居たのだが、

日本の若い女性、本当にしっかりした人が出て来ている。以前ではとても考えられなかつたこと、我々は安心して全行程を彼女にまかせたのである。

四日からは飛行機で南下、杭州・無錫・蘇州・上海とつたが、それぞれの都市で専門の

ガイドさんが添乗してくれた。彼等はいずれも若い人達で、女性の場合もあったが、どのガイドさんも非常に達者な日本語をあやつり、しかも、日本の歴史や文学にかなり造詣の深さを見せていた。

杭州で西湖のほとりに着いた時は、あいにくの雨であつた。「皆さんのお国の俳句に、象潟や、雨に西施がねぶの花」と言ううのがあります。西施ゆかりの西湖の雨もまたいいでしょう」と説明された時、一同驚きの声を発したものである。

こうした例は、それぞれの都市の説明の中で何回も出合ったのである。あるいは、サンブルの様なものがあるのかも知れないが、それにしてもガイドブックや丸暗記の説明とは、内容の深さが違つていた。

彼等のほとんどは、未だ中国では数少ない大学卒の人達であり、国の経済発展の重要な一環としての観光事業にあらずさつていての観光業者もある様だ。

それにしても、彼等の説明や態度の中に、中国あるいは、それ自身の故郷である町の誇りや自信を感じ取つたのは、私ばかりではなかつたはずだ。

中国五千年の歴史と文化が、そうさせているのだろうか。



雨あがりの西湖で



すいひつ
川原町水天宮
富田直美

飯能河原治いの道も、溝原の桜でパッと華やいでいる。もうすぐ咲く、天覧山のつづじも今から楽しみだ。

天覧山を仰ぎ、河原がすぐそばのこの川原町に住んで九年になる。ここが、飯能で一番眺めのよい場所だと勝手に決めていて、わが家の窓から季節の移り変わりを楽しんでいる。

ここに越してすぐの頃は、東へと歩いていく飯能の中で取り残されたような町だと思っていた。でも、諏訪神社のお祭りなどの町内行事に参加しているうちに、古くからの仕来りがしっかりと伝承されていて、二〇〇戸余りの町内がひとつになるのを感じた。そして、行事を通じて、新入りもすつと溶け込める雰囲気も、なかなかいいものだと思ふようになった。

飯能河原治いの道を歩くと、西川材で築えた往時の家並みが残っていて、昔の人々の生活の息づかいを感じる。ここは、後乗りの若い衆が「ちよっと一杯」とのれんをくぐったろうと思われれる店構えの家もある。そんな道に面して水天宮分社がある。安産と水難よけの守護神とされていて、昔の人々にとっては大切な存在だったろうに、今はひっそりとしている。

今年、水天宮の当番が回って来た。毎月五日に、町内を回り持ちで、一月と八月は五人、その他の月は三人が当番となり、水天宮様わきの社務所に詰めるというものだ。一日中なので、都合の悪い場合などは、一定の金額を出して、町内の長老にお願ひすることもできる。わが家

のある一角は、川原に住んでせいぜい十年ぐらいの人ばかりである。今までは、長老にお願いしてきた。

さて、今年はどうしようかという事になった。一日中はちょっと辛いとも思う。しかし、神様のことなのに人をあてにするのも申し訳ないような気がして、今年は自分で勤めさせて頂くかと思った。



石割橋より水天宮をみる

長女の出席の時には、日本橋の水天宮様にお参りしたのでもの。その御礼ということ、いいチャンスかもしれない。

そして、初めての三人が一緒に当番をすることになった。さて、当日……

朝八時頃までに水天宮様のところへ急ぐ。社務所は、夏の川遊びの時の監視所となっている

る建物だ。いつもは閉めたままの雨戸を、よいしょと開ける。三方がガラス戸になっている戸で、開け方にも工夫がいるのがおもしろい。土台が高く、六帖と台所という間取りになっているところを掃除する。

それから、水天宮様のところへ行って手を合わせた。長女のお参りとお礼を、これに、このチャンスとばかり、あれもこれもと欲ばってお願いをする。

そして、祭壇を清めたあとで、準備をして来た。樽、洗い米・塩・お頭付きの魚・人参とごぼう・お菓子等をお供えし、最後に旗を立てて準備完了となる。

当番の役目は、朝八時から夕方四時頃までの間、腹帯とお札を求めにくる人のために、社務所で待つという仕事である。朝から八時間もじっとしては時間が勿体ないと、それぞれパッチワークや編み物などの手仕事を持参した。ところが、町内の人がお参りした後で立ち寄って下さるのだ。お供えの物を三人で分けて下さいねと言って下さった。ある方は、熱海のみかんですと、大はきかんと頂いた。そして、お茶を飲みながら昔話などを聞いていた。あつという間に一日が過ぎた。

急がしい日常から、ちよっと離れて、ほのぼのとした貴重な一日となった。

私達の時には腹帯とお札を求めに来る人はいなかった。その後、ちよっと興味があったので調べたら、平成三年度は、お札三〇〇円が三七枚、七〇〇円の大が八枚、腹帯は、一、二〇〇円が一三枚、お守、三〇〇円が二四枚だった。

水天宮様の当番をして、近所の人々に今なお親しまれているのがわかり、ぐっと身近になった。水天宮様の当番をなにかと大変なことに思っていたけれど、安ずるより辛むが易しい一日だった。



川原坂(大正5年) [写真集・飯能より]



太宰春台画像

I 黒田直邦と護國学派

飯能市内に残る直邦関係の資料の中から、ここでは享保期のものについて知られてみよう、古くから知られるのは、

『琴鶴丹艸公墓碑』

であって、享保二十年（一七三三）三月二十六日に七十歳で卒した直邦のなきがらを、多摩主山頂に葬り、翌年家臣らが協議して碑や墓を立てたという頌徳碑である。

書き出しのほうに、「世子使純誌其墓」とあり、直邦の嗣子直純に使わされた純（太宰春台）が墓ならびに書したことが分かる。推測をたくましくすれば、碑を作るために春台が、飯能の地を訪れ下見をいったのだからか（後述します）同じように春台の師事した荻生徂徠も、柳沢吉保（直邦の義父）の使いとして甲州へ主人の墓訪の下見に携わっているからである。

次に、四月世子襲封沼田侯とあり、直純が四月十五日、四十一歳でその遺領を継いだことも添えられている。春台と直純の関係は、その後の処遇をめぐって冷たいものとなっていて、けれども直邦と春台の関係は別で、徂徠が没した享保中期以降、護國社中の説はまことに一世を風靡するものとなっていたらしい。ことに春台は徂徠の経済論を最もよく祖述する人物

ないところまで来ていた。だから、幕府は政事上の意見をしばしば徂徠に諮問し、門下の春台にも「春台上書」という形で、意見を求めたこともあったから、その名声はますます高まっていたのである。

大名の間にも尊信する者がふえ、黒田直邦も家臣に準じた扶侍米を春台に贈ったといわれるだけに、老練にある直邦の死は、春台にとって非常に頼もしい後

継ぎを失ってしまったといえるのではないだろうか。なぜならば、これまでも直邦その字句、文章を異にするものが出来たほど評判が良かったのである。

黒田直邦をとりまく人たち

岡野達雄

として、享保十四年（一七三九）に『経済録』を出版。その版本・写本ともに種類が多く、往々その字句、文章を異にするものが出来たほど評判が良かったのである。

例えば、同派の安藤東野がなされたとき、師の徂徠が直邦（下館侯）に送った書簡にはこうある。（書き下してあります）

享保期は、幕藩政治の弊が表われ、幕府や諸藩がひどい財政難に悩まされていたから、単なる制度、政策の改革や、これまでの儉約一辺倒の緊縮政策だけでは、財政健全化にはつながら

下館侯に送る書
敬啓。先月十三日（享保四）

一七一九、安藤東野がついに亡くなりなりました。（中略）彼が亡くなったのは殿も存じのこと

邦などの近親者から集めた詩文に、春台も同じく、「哭東壁（東野のこと）二首」を贈っている。

で、親鳥が卵をかかえるように殿が庇護して下さったことは、私どもも知っております。でも、私乏のうちに死ぬことをまじめに望まなかった。貧乏はもちろ

時代はやや下がるが、春台の門人松崎惟時は「春台先生行状」の中で、享保頃の先生と直邦の交流を扱い……

なりました。天は彼を貧乏にし、苦しめ、さらに寿命を奪い、そのうえあとつぎがないようにしました。なんとむごいことではありませんか。

諸侯（本多忠純、柳沢経隆、故沼田侯直邦）の三人が、春台へ「醜業」り続けていたが、「惟沼田侯厚待以礼、終始不改、侯為執政増封、退朝即日益醜業、侯之賢、深感其知遇、侯卒後、如加治中山、謁其墓」という程、直邦は春台を遇していたのである。

もし殿から彼をいたむ一首の詩をいたされるならば、彼の最後まで恩顧を賜った義が完成するでしょう。それが文集の中に載っているのも、彼の死後の名譽です。殿にそのお心がありませぬでしょうか。茂野恐懼

安藤東野は徂徠よりも十七歳も若く、やはり柳沢吉保につき、徂徠に師事して詩文音楽に通じ、書にはたくみで詩文、徂徠門下では文章は第一といわれる才能をもっていたが、この手紙のように三十七歳で病死。直

碑文は、「公諱直邦姓丹艸中山氏、冒母姓黒田氏、琴鶴其別号也」と続くように、直邦は母方の黒田氏を名乗り、享保九年（一七三九）六十歳で直重を直邦と改称している。直邦名は十年余ということになるろうか。

II 直重と母方
ところで、今回の飯能市石造遺物調査から、『慈広院健徳清勇（中山直重）夫人黒田氏碑』

と、

と、

が、能仁寺の直邦両親の墓の間
に立ち、最後の行に、「從四位
下行豊前守丹治真人直重謹識」
の銘文が見つかった。

文ではまず、夫人が「黒田直
相の長女。家にあつては孝友善
事があり、嫁しては君につかえ、
大姑を敬い、必ず孝した」と、
その功徳をほめたたえ、親とし
ては、「男五人、女三人を生ん
だ」と書かれている。「男とは、
直好・直道・直重・延貞・直清
の五人であり、女三人は五代将
軍徳川綱吉の時、侍女として近
くに列し、おしなべてよろしき
婿や男女多夫を得た」と誌し、
ここまでは家族の紹介をしてい
る。

ただ晩年になって、幕府の役
職についたのは、「直好と直重の
職の二子で、朱門に走らず、権貴
に媚びることなく、是れこそほ
士である」と直邦と二人のPR
も怠っていない。

夫人の口癖は、「人は知に當
つて自ら足る」であったが、あ
る時、歎いていうには、「道を知
るとは、己を作ることに也な
らない」と、しみじみ語つたと
もいう。

そんな夫人も、老いには勝て
ず、享保三年（一七一八）病床
にふした。

この時、「直重が長い服をま

とい、表は絹、裏が綿の織物を
奉つた時」夫人は、「百分に過
ざる也」と断り、「若し著侈に
流されるなら、皆孫の性まで」
試や織を欲しがらる。知だの仁だ
のといつてみたところで、その
汚名を免れることはできない。

と、直邦を戒めたという。願わ
くば「吾家に於いて死を迎えたい
い。くれぐれも直好と直重が力
を合はせよう」と言い残し
たあと、新室に移ってから一カ
月後、七十八歳の命を終えたそ
うである。

今までも享保四年に直邦が来
飯した歴史的事実や、この時代
の遺物が多いのは分つていたが、
改めていろいろ考え合わせると
「享保四年」は町全体を上げて
の大きなイベントに明け暮れた
年のようである。綱吉のプレー
ンとして仕えた直邦が、吉宗の
プレーンとして近くにいたこと
を物語る碑として注目される。



平成三年度の活動

三年度の特色は、前期は郷土

館の特展、能仁寺展に併せて、
黒田直邦像にスポットをあて、
後期は黒田歴史散歩として青梅
地方をとりあげ、ともに一般市
民からの参加が多く、活動の輪
が広がってきたように思います。
参加できなかった方に、一
年間の活動をお知らせします。

●四月例会（％）

◆飯能のお殿様 黒田氏を語
る 講師 坂口和子氏
 岡野達雄氏

郷土館で特展中であつたこと
から活発な質疑が交わされ、昔
日の能仁寺が浮かび上つてきた。
黒田のお殿様の様子が語られた。

●六月例会（総会）

◆記念講演 アーネストサト
ウと飯能

講師 庄田元男氏

サトウ日記を読みながら、ア
ーネストサトウがたどつた飯能
周辺にスポットをあてながら話
された。時代性が読みとれ、ま
た、外国人から見た飯能として
考えられるおもしろさがあつた。

総会は、小山市長、児島文化
協会長をお迎えし、事業案、予
算案など、すべて承認された。

●郷土はんのう第十一号発行

◆九月例会（％）

◆バスツアー コスモス咲く
青梅路へ

雨の一日であつたが、内容は
豊かであり、盛り上つた。三田
氏を中心にして、花開いた青梅
文化の歴史を知つて驚く、飯能
安楽寺の軍荼利明王は、飯能
常楽院とは違つた優美さがあ
り、天寧寺では三田氏の力を偲び、
庭船観音では本堂にて話を伺い、
それぞれの寺院で見聞を広めた。
バスは雨の中、まるで豊城の
ような美多摩の山々をぬい、一
路御岳へ、ケーブルに乗り御岳
神社へ、途中茶屋にて昼食、昼
食後、御岳宝物館で国宝の鑑
定を見学下山。帰路、青梅博
物館にて、本日の歴史の総まと
め、四〇名の参加者を得、好評
のうちに一日が終つた。



事前研修会は「晴れ」

●十二月例会（％）

◆こんにやく作り
講師 内野博司氏

昔ながらのうすについて作る
方法から、現代的な粉末を用い
るやり方まで、自ら体験しながら
のこんにやく作りは、こんにやく
の歴史や作り方を、楽しくひと
く問答を交えて、楽しいひと
きであつた。

●二月例会（％）

◆原市場赤沢村の産業
講師 浅見 茂氏
◆加治 岩沢村の物産
講師 西野長治氏



加治郷土資料同好会と交流

この地域は、名栗川流域の上
下であり、両氏の話を聴きなが
ら、その産業の違いを比較する
ことで、飯能の風土が浮かび上
つてきた。

以上が今年度の主な事業であ
つたが、日頃からいろいろな研
究に取り組んでいる会員が多く
なつてきたように思う。この例
会が発表の場として、更に充実
していけたらと願っています。

平成四年度
活動予定

◆四月例会

飯能市街地歴史散歩

飯能神社縁起……柳川真一氏

◆入子地蔵……入子昌男氏

◆市街地歴史散歩……加藤義雄氏

◆六月例会（総会）

記念講演「秩父の人生儀礼に

ついて」

講師 果立歴史資料館

館長 樫原嗣雄氏

◆十月例会

バスツアー 八王子歴史散歩

◆十二月例会

事後学習会

◆二月例会

地場産業シリーズ

飯能駅を中心にして「木材の

街並み」

加藤義雄氏

毎年人気の高い県外歴史散歩

は、今年も八王子周辺と決まり

、近くて遠い。八王子の歴史と

飯能の保わりを勉強します。

また、木材の街並みは、か

つての駅前通りを見直しなが

ら、西川材の街を再現しながら

ご意見・ご要望、また資料な

どお持ちの方は、事務局までお

寄せ下さい。

中国から竹寺へ・日中文化のシンボル

十一月に「牛頭明王像」開眼除幕式

平成四年四月に、飯能の心の

ふるさと竹寺へ、中国から二メ

ートル余りの大ブロンズ像が、

贈られてきました。これは竹寺

副住職、郷土館友の会会長、郷

土史研理事）大野邦弘氏と、中

国文化人との十年來の交流から

生まれたのです。

大野氏は、書家として、墨絵

の先生として活躍されています

が、特に文化を通して国際交流

に、力を注いできました。

中国へ再び訪れていくうちに

仏教、書道、絵画界の人達と友

好の絆が生まれ、その友人達

が資金を集めて明王像を製作し

寄贈して下さいました。

製作者は、北京中央工芸美術

学院、副教授、何宝森先生で

迫力のある見事なものです。

竹寺では、十一月の開眼除幕

式に備えて台座に銘を刻み、牛

頭明王東渡記念の記念碑も建

立すとのこと、飯能でも日中

文化の花が開く時がきたのでし

ょう。（ご好意により、一般公

開前に先駆けて載せて頂きまし

た。）

■新入会員

金子仙太郎（飯能市北川、一三三）

面川弘之（飯能市本町四一）

面川彰子（飯能市本町四一）

松澤 健二（飯能市一四一三）

遠山元信（上尾市上町一四一四）

石森秀雄（飯能市岩井五）

粕谷敏太郎（飯能市岩井五七五）

吉田敏子（飯能市南川一九七）

石川哲三（飯能市中山二七）

島田和枝（大宮市岸柳一八二四）

稲垣和江（飯能市双六九七一四〇）



何宝森先生ご夫妻と大野氏

新会員募集

会費納入、入会の手続きは

郷土館で

◆事務局 千331

飯能市飯能二五八一

飯能市郷土館内（大野）

電話〇四二九・七二一四二四

計報

元飯一小校長で、文化財保護

審議委員長、郷土史研理事の吉

田茂先生、郷土史研監査、山

岸雄司氏がご逝去されました。

心よりご冥福をお祈りいたしま

す。

吉田茂先生は、郷土はんのう

第十一号の随筆「ある覚書から」

が、絶筆となりました。

春の異動で、学芸員

柳戸信吾さんが、生涯

学習課、文化財係に転

出、代わって、新任の

女性、大野聡子さんが

着任致しました。柳戸

さんには、事務局でお

世話になりましたが、

今年度から大野さんに

代わりです。

郷土館……

新スタッフでスタート！



写真右より、浅見館長、大野さん、尾崎さんです。

編集

後記



▼今号は、会員外の若い方々の

投稿が目立ちました。世代交代

をしていかねばならぬ時期に

若者のフアンがいることに、勇

気づけられました。歴史ブーム

と言われているいますが、自分の

目で見えた歴史観を見出しにい

くのも、人生のいきなりになる

のかも知れません。この郷土史

研を研究発表の場として、大い

に利用してみたい。

▼総会と十二月例会の後、恒例

の懇談会が行われます。雰囲気

に酔ってみませんか……

▼最近、中国文化を愛する会員

が増えてきました。そこで趣向

を変えて、旅行のみちしるべ

を載せましたが、いかがでしょ

うか。（桑山）

題 字 小谷野 寛一

表紙写真 井上 峰 次

写真説明 坂口 和 子

郷土はんのう 第十二号

発行日 平成四年六月十三日

発行所 飯能郷土史研究会

飯能市飯能二五八一

飯能市郷土館内

電話〇四二九・七二一四二四

印刷所 コパヤシ印刷